

談話室

友人に学ぶ経済が大切! 経済の勉強しよう! 弁護士菊地幸夫

弁護士
菊地幸夫 さん

profile

弁護士(第二東京弁護士会)。番町法律事務所、中央大学法学部卒業。元司法研修所刑事弁護教官。現在、社会福祉法人練馬区社会福祉事業団理事も務める。また、日本テレビ「行列のできる法律相談所」及び「スッキリ!!」を始め、数本の番組にレギュラーとして出演。弁護士業務の傍ら体力作りにも勤しみ、各地のトライアスロン大会へも出場。地元小学生のバレーボールチームの監督等も務めている。



——高校時代はどのような学生でしたか？

高校1年生のとき、癌で母を亡くしました。年の離れた弟たちは、当時、まだ小学校1年生と3年生でした。私は、中学校からずっと部活でバレーボールをやっていたのですが、母がいなくなってからは部活をせずに、とにかく家に早く帰ってきて、預かってもらっていた弟たちを近所のおばさんのところに迎えに行き、買い物に行って、夕食を作って、弟たちをお風呂に入れるという生活でした。全部終わってからがようやく自分の自由時間だったので、深夜3時くらいまで徘徊して、ラジオを聞いてから朝少し寝て、それから高校へ通うというような、ほとんど非行少年でした。警察のお世話にならなかったのがせめてもの救いで、成績も学年で下から10番目くらいでした。

転機が訪れたのは、高校3年生のときです。父が再婚して、家事から一気に解放されたのです。そこから、もう一度狂ったようにバレーボールをはじめ、高校3年生の1月までずっと続けていました。成績も、少し勉強したらグンと上がりました。成績が上がって面白くなってきたので、どんどん勉強したところ、卒業するときには上から10番くらいになっていました。

——数学はどうでしたか？

数学もそこそこの成績を取って卒業したと思います。そんなに悪くなかったですよ。でも受験では使わなかったです。一番不得意だったので。

高校生のときは「サインとか、コサインとか、なんでこんなもの勉強するんだ。文系に行くんだから、人生でこの先絶対に必要ないのに」と思っていました。それが弁護士になって交通事故などを扱うと、物理の分野かもしれませんが、道路の摩擦係数で速度を推定するときなどに数式が出てくるのです。「なるほど、人生こういうところで数学を使うのか、高校の勉強も馬鹿にしたもんじゃないな」なんて思ったりしています。「将来役に立つことがあるんだぞ」って先生が言っている。「嘘だー」と思っていたのですが、やはり先生はすごいなと思いますね。

——どのような方法で勉強したのですか？

全然勉強してなくて、誰にも教えてもらえないので、ただひたすら暗記していました。要領よくとかではなく、とにかく目の前にあるものを読んで覚えるという感じでした。歴史の本なんて、目次から索引まで全部暗記です。他に勉強方法を知りませんでしたから。

数学についてはまず公式を覚えました。公式通りの問題は出ませんから、実際の問題と自分が習った基礎の公式とが、どうつながっているのかな、どうやってこれを分解していったら公式が使えるところまでほぐれるのかな、というのを問題文から読み取っていきました。頭のいい人はパッとわかるのでしょうか、私はそこがなかなかうまくいかなかったのですが…。

——弁護士になろうと思ったきっかけは？

私の父が職場で労働組合をやっていて、その関係もあって弁護士になってもらいたいと思っていたようです。「弁護士はいいぞ、弁護士はいいぞ…」と洗脳されていたからなんとなく大学も法学部を受験したのかもしれませんが。

でも本当は教員になろうと思っていた、大学の1,2年は教職課程を取っていたんですよ。そっちの方がむしろ向いていたのではないかと思っています。今でも近所の小学校の女子バレーボールチームの監督をやっていますし、それ以外にも大学や司法試験の予備校でも教えていました。司法試験に合格した人が入る司法研修所の教官もやっ

ていました。そんなことをやっていたのも、ずっと教員になりたいという想いがあったからだと思います。

一方、私が大学生のころは、公害が多く、その裁判で弁護士が活躍するという時代でしたので、弁護士になって社会に役立ちたいという思いもありました。

大学3年生になると司法試験の一般教養試験が免除になるので、周りが司法試験の受験を始めます。私もそろそろ教員か弁護士か決めなければと思い、母校の恩師に相談に行きました。そうしたら「お前は不屈きものだ！教員をやるなら教員一本でやれ。両方やってどちらにするか選ぶという考えは甘い」なんて言われてしまいました。「でも、教員はあとからなる方法もあるし、まだ若いんだから法律を勉強してみろ」と背中を押してもらい、それで教職課程をやめて法律一本にしました。

——最近の教育について思うところをお聞かせください。

私がやっていた、とにかく暗記するなんていうのは勉強としてひどいものだと思うんですよ。問題と答えのワンセットを暗記するというだけです。から、全く考えていない。でも当時としては時間がなかったし、それしかなかったのですが…。やはり先生方には、考える勉強というのをしっかり教えていただきたいと思います。

大学で教えていたころ、4月に入学した法学部の学生に、意見が分かれるような考える問題を出したのですが、全く考えない。「六法全書を出さなきゃダメじゃないか」と言うと、机の上に置けりゃケースに入ったまま。「ケースから出さなきゃ読めないだろう」と、そこまで言わないとダメなのです。司法研修所でも同じです。みんな答えを教えてくださいという顔で座っているのです。

それから、学生がテキストを持ってきて「ここに書いてあるのがわからない」と言うので、「何がわからないの？」と聞くと「書いてある意味がわからない」と言うのです。「それは国語の問題だから何が書いてあるか分かるまで自分で読んで



来い！」と突き返すのですが、まず自分で考えてどこがわからないかを絞りに絞って、それではじめて質問するというのが質問のマナーではないかと思います。一から全部教えてもらうというのは、自分の勉強にもならないし、相手に対しても失礼じゃないのかなという気がします。

現在、小学校の評議員をしていて、授業を見る機会が多くあるのですが、小学校では先生方がかなり工夫されて双方向授業を行っています。小学校レベルではうまくいっているのが、中学・高校と進むとだんだん一方的な授業になってしまうのでしょうか。大学でも授業をボーッと聞いているだけになってしまうのです。だから考える癖をつけてくれないと困るなと思っています。

——最後に高校の先生へのメッセージをお願いします。

大人になって、いつ買ったかわからない岩波の『数学入門』という本を読み返して「数学っておもしろいな」と思いました。多分先生方はそういう面白さをよくご存じだと思います。だから子どもたちには、そういう面白さを上手く伝えていただきたいと思います。それが伝わらないと苦痛になってしまう。学問をやるのは人間なので、学問をやってどう感じるかという、人間味があるところを触れていただけたらよいのかなと思います。

また、学問を通じて倫理的なことも子どもたちに教えていただきたいなと思います。国語・数学・理科・社会で失敗しても、それほど人生は狂いませませんが、倫理で失敗して人生は大きく狂いますので、そういうことを教えることで子どもたちを導いていってくださればと思います。

授業力アップ アクティブ・ラーニング

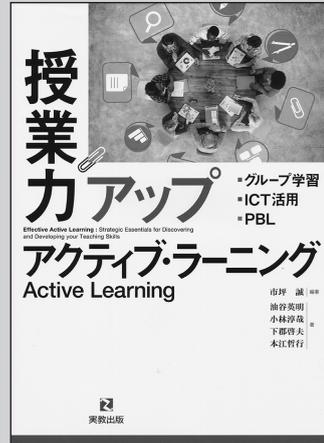
グループ学習・ICT活用・PBL

B5判 176頁 ISBN:978-4-407-33931-4

定価 2,160円 (本体 2,000円+税)

編著：市坪 誠

執筆：油谷英明、小林淳哉、下郡啓夫、本江哲行



ご授業の参考に!! 現役教員や教員を目指す学生におススメです。

◆本書は、アクティブ・ラーニングを想定した授業において、どのように学生たちが能力を伸ばせるようになるか、教員の授業力アップを実現する「教え方の指導書」です。

◆学生がどのような学習状態となるのか(学習到達目標)を踏まえ、これに到達するための授業構造のありかた(モジュール)と教え方のスキルを解説しています。

◆グループ学習やICT活用、PBLといった授業において、具体的なモジュールとスキルのあり方を章立てて明示しています。(弊社Webページからは、補充用資料などがダウンロードできます。)

◆教員が自らをフィードバック・セルフチェックできるだけでなく、組織的なアセスメントが行えるよう、チェックシートの活用を提示し、教え方のさらなる向上(PDCAサイクル)が可能となります。

1章 教育力の基礎	5章 PBL型授業
1節 実践できる授業のために	1節 問題発見・解決型学習PBLの特徴
2節 授業の型(教え方のモジュール)	2節 PBL授業とそのプロセス
3節 教員スキル:教え方スキル	3節 PBL授業での指導のポイント
4節 まとめ	4節 PBL授業の設計
2章 アクティブ・ラーニングの基礎	5節 PBL授業に必要な教員スキル
1節 到達目標の達成	6章 チームによるプロジェクト型授業、卒業研究・ゼミ
2節 学生が主体となる心得と仕掛け	1節 チーム活動の計画
3節 PBL教授法の心得	2節 チーム活動の実施
3章 グループワーク型授業	3節 評価
1節 グループワーク型授業の授業設計	7章 発表・プレゼンテーションスキルの指導
2節 グループワーク型授業の実施例1 (学生の前提知識を重視した授業タイプ)	1節 発表構成
3節 グループワーク型学習の実施例2 (学生の知識・解法発見を重視した授業タイプ)	2節 発表タイトルの工夫と発表の方向性
4節 教員としての振り返り	3節 発表のルーブリック作成と活用
4章 ICT活用授業と実験・実習授業	4節 プレゼンテーションチェックリスト
1節 座学へのICT活用	5節 プレゼンテーションの位置付けとその振り返り
2節 ICT活用授業(適用レベル)の実施例	8章 FDマネジメント
3節 実験・実習・調査の活用	1節 FDマネジメントのあり方
4節 実験・実習授業の実施例	2節 自己評価(セルフアセスメント)
	3節 組織評価
	4節 まとめ
	参考文献 付録

通巻第74号

2017年4月1日発行

◎編修・発行

実教出版株式会社

代表者 戸塚雄弐

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5

TEL. 03-3238-7777

<http://www.jikkyo.co.jp/>